

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 西野寿章	(学部) 地域政策学部
<p>1 重要事項</p> <p>【研究成果】</p> <p>(1) 図書(単著)</p> <p>1) 西野寿章(2020)『日本地域電化史論—住民が電気を灯した歴史に学ぶ—』日本経済評論社.</p> <p>(2) 図書(執筆分担)</p> <p>1) 西野寿章(2019)「日本の山村における地域電化と地域社会, 住民の対応—1909～1968—」, 諸富 徹編著『入門 地域付加価値分析』日本評論社, pp.225-249.</p> <p>(3) 論文(共に研究ノート)</p> <p>1) 西野寿章(2019)「大規模野菜産地の維持要因—群馬県嬭恋村を事例として—」, 地学雑誌(東京地学協会) 128-2, pp.301-321.</p> <p>2) 西野寿章(2020)「戦後の縁辺地域における住民と協同組合による電気供給とその顛末(2)—北海道雄武枝幸町電気組合を事例として—」, 産業研究(高崎経済大学地域科学研究所) 55-1・2 合併号, pp.42-53.</p> <p>(4) 研究発表</p> <p>1) 「日本農村における電化とその利用—コミュニティと産業振興の視点から—」, 民族自然誌研究会 第95回例会(2019.7.20, 於: 京都大学).</p> <p>2) 「田園回帰期における山村の動向と地域的課題」, 人文地理学会大会(2019.11.17, 於: 関西大学).</p> <p>3) 「日本地域電化史にみられる地域ガバナンス, エネルギーコミュニティと現代的応用の検討」, 京都大学大学院経済学研究科・再生可能エネルギー経済学講座・部門 B 第4回研究会(2020.2.17, 於: 京都大学).</p> <p>【学外研究費獲得状況】</p> <p>1) 科学研究費基盤研究(B)「現代山村のレジリエンス」(平成 30～33 年度, 研究代表者・奈良大学文学部・岡橋秀典教授).</p> <p>2) 科学研究費基盤研究(B)「集团的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」(平成 30～32 年度, 研究代表者・明治大学商学部・中川秀一教授).</p> <p>【教育成果】</p> <p>【学部講義】 担当講義の学生評価は, 農村地理学 90.0 点, 観光地理学 86.5 点, 地域振興論 92.3 点であった(地域政策学入門は 3 人の教員による授業のため除外). いずれも学部, 大学全体の平均点を上回っているが, 引き続き受講者が問題意識を持って, 地域の諸問題に興味関心を向けてくれる参加型授業となるよう考えたい.</p> <p>【学部演習】 担当している演習 I (3 年生)では, 毎年, フィールドを定めて地域調査研究を行い, 調査報告書を刊行している. 2019 年度は, 90 万トンの産業廃棄物が不法に持ち込まれ, 25 年間に及ぶ住民自治の力によって産業廃棄物の撤去を実現したものの, その間に集落は限界化が進んでしまった香川県土庄町豊島の観光化とその課題について研究を行った. その成果は, 『離島の現状と地域振興の可能性—香川県土庄町豊島を事例として—』としてまとめた. 演習 II (4 年生)は, 各自の問題意識に基づいて卒業論文を執筆し, 就職希望者は, 全員が就職を決めて卒業した. 今年度から始まった基礎演習(2 年生後期)は, 次年度の演習での地域調査を想定した文献輪読と地方都市の中心市街地衰退の要因について研究した.</p> <p>【大学院】 修士課程演習生 1 名, 博士課程 1 名在籍. 修士論文, 博士論文の作成に向けて, 適宜指導を行った.</p>	

【社会的活動】2019年度に学外で担当した公表可能な委員，社会的活動は次の通りである。

【学会関係】人文地理学会・代議員，経済地理学会・評議員，群馬地理学会理事

【行政関係】1)群馬県ぐんま緑の県民税評価検証委員会委員長，2)群馬県公共事業再評価委員会委員，3)群馬県森林・緑整備基金評議員，4)群馬県埋蔵文化財調査事業団評議員，5)高崎市市有林管理委員会副委員長，6)高崎市・信越本線活性化協議会委員。

2 その他の事項

・2019年度の最大の目標は，修士論文を起点とした日本の山村における地域電化史を本としてまとめることにあった。研究奨励費の助成を得て、『日本地域電化史論—住民が電気を灯した歴史に学ぶ—』を2020年3月20日に刊行した。戦前，戦後の主に山村地域における内発的な地域電化過程を分析して，今日のエネルギー問題を国民的課題として行くための道のりについて，地方分権の視点から考察した。

・地域科学研究所長として，春と秋の公開講座をはじめとした地域貢献事業，長野堰の歴史的役割，高崎市製造業の特性，高崎市中心市街地の再編に関する研究プロジェクトを推進した。地域貢献事業では，多くの高崎市民，群馬県民の参加を得て，互いに現代社会の諸問題について学習した。研究プロジェクトについては，長野堰の開削時期をめぐって研究所独自のデータを収集して，その謎に迫り，製造業研究では関係企業の協力を得て，ベトナム，タイの海外調査を実施し，中心市街地研究では，有識者を招いての公開研究会を実施した。なお，年度末に予定していた中心市街地研究に関する国内調査は，新型コロナウイルスの感染拡大に伴い中止した。

3 次年度以降の計画・抱負

【研究】

- ・2020年度は，研究分担者となっている科学研究費研究の内，「集団的林野経営の地域的機能分析と地域振興政策への応用可能性に関する研究」の最終年に当たる。連休では，1つの生産森林組合の歴史について，戦前に遡って資料分析を行いつつ，旧入会山における素材生産によって得られた収益の組合員配当のコミュニティに与える影響について研究を行って，社会的紐帯としての共有林の地域的影響について考察する。
- ・もう一つの科学研究費研究「山村のレジリエンス」については，上記の共有林の社会的機能を再評価しつつ，奥地山間集落の維持条件について考察する。

【教育】

- ・学部講義科目については，受講生の理解度が年々低下していると感じている。理解度を高めるための工夫を担当講義について考えたい。
- ・大学院博士後期課程に新たに1人が加わった。博士論文の作成に向けて，指導を行う。
- ・2020年度の演習Ⅰは，高崎市の中心市街地の変容について研究を行う。これまでの演習Ⅰでは，主に過疎地域をフィールドとして研究を行ってきたが，今年度は，過疎地域と同様に人口減少と高齢化の著しい地方都市の中心市街地の変容について研究を行う。具体的には，高崎市の中心市街地を例として，老舗の歴史と現状，商店街の変容，町内会の歩みと現状などについて調査研究を行う。群馬県では，これまで研究を行ってきた過疎地域だけではなく，都市の中心部も同様に人口減少と高齢化が進んでいる。地方の都市と山村が，なぜ共通の問題を有するようになったのか，その要因分析を行って，相違点を明らかにしたい。

【地域貢献事業】

- ・地域科学研究所長として，研究プロジェクトのまとめと推進，地域貢献事業を企画し実施して，高崎市民，群馬県民の生涯学習に寄与する。所長3期目最終年度に当り，各種事業の評価を研究所内で行い，改善点について検討する。